

アカタン砂防エコミュージアム

Akatan Sabo Ecomuseum



た なか やす し
田中保士*
TANAKA YASUSHI

1 はじめに

アカタン砂防は、福井県南越前町（旧今庄町）古木に位置する。九頭流川支流日野川の枝川アカタン（赤谷川）に点在する明治の歴史的砂防施設である。村人は都市住民と連携した「田倉川と暮らしの会」を平成10年につくり「アカタン砂防エコミュージアム」活動を続けている。本報は、暮らしの中の「記憶の収集」「記憶画の制作」を語り、地域固有の砂防文化を紹介する。また活動が地域振興・観光振興にどのようにかかわっているかを述べる。

2 アカタン砂防の経緯

アカタン砂防の歴史は、福井県史、福井県南条郡史等に記録されている。日野川流域では明治28・29年（1895・1896年）の両年に大水害が発生した。明治30年（1897年）3月砂防法が制定された。その年大豪雨による大水害が発生、アカタン大平が崩壊土砂災害となった。明治33年（1900年）11月福井県砂防事業第一期の施行規定を定め、着工することとなった。

村人は、記憶の収集からアカタン砂防の経緯を検証した。古老の記憶から、助け合う村の暮らしと、災害の現実を少年の感性で伝え聞かせてくれた。自分たちの村は自分たちで守り復旧するという良き村社会が、懐かしい農山村の風土の中に見

える。先人たちの営みを知ることで、未来の暮らしと砂防文化を語ることができる。村人は学ぶべきことを見つけ出し、地域の人都市の人に伝承している。

3 豪雨と土砂災害体験の記憶

明治26年生まれ、『歌門宇太郎』は、アカタン豪雨災害と土砂災害を体験した。その後記憶の収集を続け手記を残してくれた。村の語り部、面谷さんと権八さんが手記を受け継ぎ、新たな記憶を加えて村人や来訪者に語り伝えている。

『明治30年7月の土用、朝八時過ぎになってから雨が降り出した。真黒な雲が舞い下ってきて、向こう側の山が見えないほどだった。大粒の雨が空と地面を同時に繋いだように降り出した。2時間ほどの集中豪雨だった。昔の人は「卯の刻の雨は、己で晴れる」と言っていたがその通りであった。午後になって雨は止んだが、村中は大混乱だった。低い家屋20戸ほどが床下浸水の憂き目にあった。軒下の焚き木は濡れ、囲炉裏まで水浸しになって午後3時になっても昼食が食べられなかった。村の橋は殆ど流されたが、県道の橋は村人たちが土俵を積み上げ保護したので助かった。清次郎・喜三郎・駒吉の家の石垣に、濁流が打ち寄せて危険な状態になった。村人が山からナラ・ケヤキなどの立木を伐り出し、木の根元を括りつけて流れに投入、石垣にぶつかる水流の勢いを弱めて警戒した』。伝統の「木刎ね」だという。『今の県

*田倉川と暮らしの会
Takura River and Life Activities

道あたりから向かいの山まで、一面の大川になっていた。その日は村中の大人たちが手分けして、いくつかの危険箇所を見守った。警戒保護は夜半まで交代で続けた。村が炊き出しをして、床下浸水の清次郎ら五軒の家族と、警戒に当たった村人に握り飯を配って凌いだ』。

『あくる日、村人が山伝いにアカタンの中ほどまで行ったとき、奥の方からゴウゴウ音をたてて、谷間いっぱい濁水に押し流されて出て来る山津波に出くわした。直径三十センチ以上もある大きな立木が、草がなびくように土砂といっしょに押し流されて来た。自分が立っている足元まで地割れして来るような気がしたので、一目散に木藪の中をかけ抜け村の人たちに急を告げに戻った。「大きな山が流れてくるぞ！ 古木は助からんぞ！ 大海ができるぞ！」。幸いアカタン口で土砂は止まった。アカタン奥山の太平洋の台地が、豪雨のため地すべりを起こして流れ出てきたのだった。アカタンには、膨大な量の土砂や流木が埋まっている。この後また雨が降って山崩れがあれば、田倉川に流れ込み川を堰止めて大きな被害が出ると予測された。福井県は緊急に砂防地域に指定し、草一本採ることを禁止した』。

『当時古木は八十戸、人口四百二十人と思われた。被災のため食料が不足、馬上免や長沢から補給米として助けてもらった。常にアワやヒエ、ダイコン菜っ葉や、ヨボの葉、フキなどの混ぜご飯が主だった。私の母も馬上免へ米を買いに行ったことを思い出す。村の人たちは物が不足して困っていても心は豊かで、助け合いの精神が強かったように思う。田んぼの復旧は、その後十数年もかかった。ひたすら村人たちの自力更正の力で、今日のような状態にまで復旧することができた』。防災訓練などしていないが、当時の防災・復旧組織は完ぺきだった。区長の采配で整然と動いたという。集落では子どもの頃から大人のやることを見ている。父親の代わりに子どもが村仕事に出たりして覚えてきたからだ。

4 砂防工事の記憶

『明治33年福井県は、砂防専門家大屋宇吉を岐阜県から招いて、工事主任に起用し工事に着手した。

アカタン入口の土えん堤（九号えん堤）工事を一日中見ていた。赤土山を崩して、男女2人が数珠つなぎのように担ぎ出す者20数名、搗き固める老若女性40～50名が、美声の音頭取りに合わせてえん堤を右往左往、面白くお祭りのようだった』。

アカタン砂防には二か所の土えん堤があり、九号えん堤は堤長72m堤高6m、八号えん堤は堤長112m堤高10.5mの巨大な造りである。主に大勢の女性たちが音頭に合わせて歌いながら搗き固めていく、伝統的千本搗きで造られた。

淀川の堤防には「千本つきには／調子のござる足と手と口／三拍子」が石碑に刻まれているという。アカタン砂防の千本搗き唄の記憶を探しているが、まだ見つからない。

女性たちは揃いの野良着姿で工事に従事していた。昔は何処の村でも麻や綿花を栽培し、手織で野良着を自給していた。揃いの野良着は、協働・連帯感を高めるものであった。赤色のタスキは娘さんだけが着けていたという土地固有の伝統に風趣が感じられる。『奥の石積えん堤は、岐阜県から石積専門工仙吉を招き、巨石堰堤の完成に努力された。作業員は今庄一円から集められ、技術者は遠方から来て古木集落に宿泊していた。工事に就業した人は1日200～300人を数え7年を要した。工事期間集落は賑わい、商売する人もいて経済的に恵まれた』。

アカタン砂防えん堤は、どれを見ても自然の摂理にかなった素直で効率の良い造りである。石材はアカタンに存在する自然が与えた良質の野石を使った。石工たちは野石の面と対話し、吟味しながら巨石を積み上げている。伝統的な石工の技と、携わった村人たちの気立てが融合したような造形と感性に魅了される。人と自然が順応した美しさ、実用の美しさを感じる。人工的な材料で合理的に造られた構造物とちがって、年月を経るごとに美しさが増して行く。近隣に住む玉村、伊藤、野村、妙珍さんは、若いころから石工として野面石積を手がけてきた。彼らから記憶を収集し、石積えん堤の築造作業を記憶画で再現した。記憶画は、アカタン砂防エコミュージアムマップ（2006年）に掲載した。今後記憶画でアカタン砂防物語を制作し、伝承していきたいと思っている。



記憶画1 アカタン砂防エコミュージアムマップから転載



記憶画2 アカタン砂防エコミュージアムマップから転載

5 登録文化財への取り組み

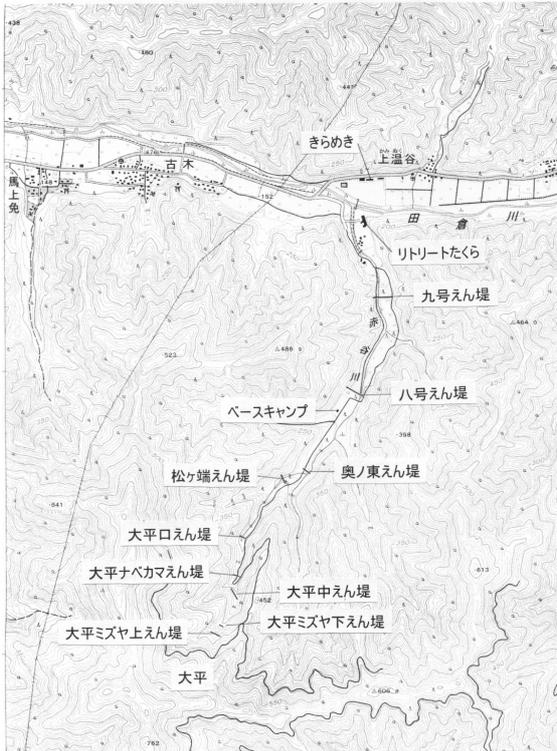
アカタンの砂防えん堤は「良い材料で、良い技術で、良い感性で、大勢の人によって造られ、いつまでも地域に役立っている」という価値観を村人は共有している。石積み表面の清掃、林道、小途まで整備と草刈りを続けてきた。夜なべして彫った手仕事の標示物・道標・案内看板は、アカタンの森に調和した。高齢者の住民語り部は特に少年たちに人気があった。

平成14年福井県は、アカタン環境整備計画査定業務を始めた。アカタン砂防を活用し砂防事業に対する啓発と学習、親水性の向上、地域活性化をねらいとした。同時に有形登録文化財の申請に取り組み、平成16年8月アカタン砂防えん堤九基が有形登録文化財に登録された。登録を記念して新潟・富山・福井・京都が連携して「砂防フィールドミュージアムを考える」のシンポジウムを開催した。立山カルデラ砂防博物館専門家、万内川砂防・不動川砂防の住民代表それに京大防災研澤田

博士が加わった。村人主催の風趣溢れたイベントとなった。その後岐阜県砂防課や牛伏川砂防住民との交流が始まった。万内川砂防とは、集落同士がバスツアーで交歓交流を続けている。平成18年福井県、南越前町、砂防ボランティアが加わり「アカタン砂防歴史遺産活用推進協議会」が発足した。新しい道標・案内板が設置され、見学途にウッドチップを敷き橋や階段が整備された。その後は毎年5月に整備作業を続けている。

6 エコミュージアムの取り組み

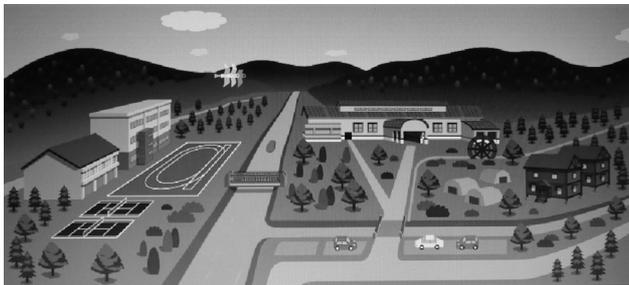
歴史的砂防えん堤群、地域の様々な遺産や資源、農山村の暮らし、無形の記憶などを村人自ら調査し研究してきた。それらがあるがままに或はより良い状態に保全する活動を続けている。この取り組みがアカタン「まるごとミュージアム」から「フィールドミュージアム」そして「エコミュージアム」と進化させた。住民も一部株主の南越前町施設「リトリートたくら」がアカタン口にある。エコミュージアムに好都合のコア施設で、活



アカタン砂防エコミュージアム領域地形図



奥の東えん堤



アカタン砂防エコミュージアム・プラットホーム
 駐車場から赤谷川（アカタン）を渡って右に宿泊コテージ、正面奥にコア
 施設リトリートたくら、田倉川を渡って左の建物は宿泊施設
 リトリートたくらホームページ [http:// www.r-takura.com/](http://www.r-takura.com/) から転載



松ヶ端えん堤



大平ミズヤ上えん堤 堤頂の美しい縄たるみ形状



松ヶ端えん堤巨石

動のプラットホームである。館内には活動の案内・調査報告・写真などを常設展示している。研修室、ホール、レストラン、宿泊施設なども備わっている。

アカタン砂防へは、途中のベースキャンプまでは乗用車で行けるが、その先は歩いてほしい。整備された砂防公園では体験できない、発見の小途風トレッキングが楽しめる。ベースキャンプは村人たちが手造りで建てた家で、エコミュージアムのサテライトになっている。発見の小途の活動拠点で避難もでき、宿泊しながら村人たちとの交流会も行っている。田倉川は、川に学ぶ体験活動の良好な常設フィールドである。RAC・日野川流域交流会と連携した、子どもの水辺安全講座、初級指導者育成講座、カヤック体験など川活動を頻繁に開催している。平成16年には「第4回川に学ぶ体験活動全国大会」を誘致、集落ぐるみで歓迎、参加してもてなした。アカタン砂防と川と集落が一体となったエコミュージアムである。

6 地域の振興への関わり

現在古木集落は52戸である。3世帯家族が9戸、老夫婦2人家族が38戸、1人暮らしが5戸である。170人の内65歳以上が約70%になった。若者は地域から下流の湯尾地区に移住し、宅良村が出来たと言われるほどだ。若い人(中年)が極端に少ないため、村仕事(総仕事)は成り立たない。村仕事は山道つけ、江ざらいなど行ってきたが、山に入る人がいなくなり、パイプラインになって江ざらいも必要なく簡単な作業だけになった。葬式も都市の施設で行うので、お寺も住職不在になり管理が出来ない。毎年開催される南越前町のイベント「そば祭り」の出店には、宅良地区9集落中3集落に減った。高齢者では、力のいるそばが打てないという理由だ。集落の祭りやむら暦の行事が急速に途絶えて行く。このような山村集落の現実のなかで、集落52戸中10戸が田倉川と暮らしの会の会員だ。2割の村人が熱心であれば、集落の振興に未来があると私は思う。発足して13年になるが会員数は増えてない。積極的に動ける人に任せておけばよいという土地の風習なのだ。地域の人達は、行動しないが決して無関心で

はない。全国から注目された優れた砂防遺産の価値に気づき、自分の住んでいる地域固有のものだという誇りを持っているのを、私は感じるからだ。

よそ者は稀にしかアカタンに入ってこなかったが、アカタン砂防が知られてからは春と秋は訪問者が多い。その度に村人は仕事を止めて丁寧に案内し解説している。リトリートたくらの受付で、アカタン砂防への見学を申し込んできた人数を下表に示す。

平成年度	18年	19年	20年	21年	22年
人数(人)	658	513	341	656	406

(アカタン砂防歴史遺産活用推進協議会資料から)

直接アカタンに入って来る人が殆どで、資料人数の3~4倍は訪れていると伊藤会長らは言う。老人・婦人会、子供会や研修グループ、家族連れなど様々である。県内外の行政砂防関係者、砂防で地域活動している団体の訪問も多い。

平成12年「川に学ぶシンポジウムin近畿」に活動発表以来、学会誌に掲載し全国の関係する大会に出かけて活動報告をしてきた。平成15年には「日本遺跡学会設立大会」に発表するなど、何処へでも大胆に広報してきた成果が表れてきた。

7 おわりに

アカタン砂防施設だけが、観光資源と思っていない。領域・遺産・記憶・住民を備えたエコミュージアムまるごとが対象である。学術的な研究、体験学習としてのテーマは豊富である。数回のキャンプ砂防経験から、都市住民と集落が「提携」する方法を考えた。昨年少し上流の集落瀬戸で地元大学と1年間提携し、卒業研究の生物調査に協力した。学生たちは村人から多くのことを学び、繋がりを持ったと感動した。「僕たちが手伝うから村祭りを再開しよう」とまで言ってくれた。限界集落と呼ばれているが、大切な山を保全している水源集落だと誇りを持っている。水源集落の高齢者は、様々な体験から生きる技をたくさん身につけている。学生たちは「村人の体験を学ぶ体験」をしたことで村人に魅力を感じ、山村への関心高めた。歴史的砂防施設と共にかげがえのない貴重な資源である。